



《1》 family 型—意味に応じて単数・複数両方の用法がある

family の類の集合名詞は、《主に英》で単数・複数の両方の用法を持つ。④では、家族を「1 つのかたまり（グループ）」として捉えているので、**単数扱い**。⑤では、家族の「1 人ひとり」の構成員について語っているので、**複数扱い**。

コーパス この型の集合名詞

class (クラス [の生徒]), **club** (クラブ), **crew** (乗務員), **crowd** (群衆), **government** (政府), **group** (グループ), **jury** (陪審), **team** (チーム) など

【!】 **audience** (聴衆) / **population** (人口) も集合名詞。主語になるときは、《米》では単数扱いが普通。「500 人の聴衆」は an audience of 500 となる。× 500 audiences とはしない。〔数の多い・少ないは large / small で表し, many / few などはつかない: The band attracted a large audience to the concert. そのバンドはコンサートに多くの観客を集めた〕

【!】 **staff** を数えるには、たとえば、five staff members (《米》では staffers という語もある) となり、× five staffs などとはしない。なお、**jury** (陪審) も集合名詞だが、個々の陪審員を指す場合は **juror** を使う。似た単語の **stuff** [ʌ] は「もの」の意味、混同しないよう注意。

「ご家族はいかがですか」と聞くときに、《米》では、How's your family? と単数扱い。《英》では、How are your family? のように、複数扱いされることもある。《米》では家族を 1 つのかたまりとして捉えるのに対して、《英》では 1 人ひとりのメンバーを意識した言い方となっている。同じ事柄に対して捉え方が異なるのである。



ここが Point! 種類を数える場合～単複同形の例外



fruit / fish は集合的に扱われ、通例**単複同形**。「3匹の魚」であれば three fish [×fishes] となる。ただし、種類に注目している場合には fruits / fishes となる。

We carry all (kinds of) **fruits** in our store.

当店にはあらゆる種類のフルーツを取り揃えております。

There are many **fishes** in the aquarium. 水族館には多様な魚がいる。

※魚は fish だけでなく、salmon (鮭), tuna (鮪), trout (鱒), carp (鯉) なども単複同形。〔プロ野球チームの Hiroshima Carp の carp は単複同形〕

※ vegetable は数えられる名詞で、vegetables の形で総称的に用いる。

英語の原理 集合名詞の単複の扱い

sheep (羊) も単複同形。普通、羊は「群れ」(だから群れのどこで切り分けても群れは群れのまま) であるという説明がされる。

Sheep are kept for wool on this ranch.

この牧場では、羊は羊毛のために飼育している。

しかし、cattle (主に牛などの家畜) は police 型の複数扱い名詞であったり、horse (馬) は horses などと複数形で使われたりすることを考えると、一概に規則が適用できるとは言えず、やはり個別の用例で覚えていくしかないだろう。ちなみに、様々な「群れ・群」を表す表現は、その種類によって異なっている。

「人の群れ (群衆)」a crowd of people 「家畜 (牛) の群れ」a herd of cattle

「魚の群れ」a school of fish 「羊の群れ」a flock [herd] of sheep

「ハチの群れ」a swarm of bees

これらの表現は family 型であり、グループを指すときと個々の構成員を表す時で単数複数両方の用法で用いる。

**ここが Point!** 物質名詞で数量を表す

- 1) 物質名詞は原則として数えられないが、例外的な用法もある。たとえば、coffee は物質名詞だが、注文では「…杯のコーヒー」という意味で複数形 coffees が可能。

We would like two **coffees**, a tea, and three doughnuts.

私たちは、コーヒー 2 杯、紅茶 1 杯、ドーナツ 3 個でお願いいたします。

- 2) また、a lot [《くだけて》lots] of, a great deal of, plenty of, a large quantity of, much, some, any, a little, little, no などを用いて「量の多少」を表現することは可能である。

There was **little water** left in the bottle.

水筒には水がほとんど残っていなかった。(▶ pp.561-565)

- 3) 物質名詞は一定の形を持たないが、それを「容器」などに入れて一定の形をなすようにすれば容器ごとに数えることができるようになる。しかし、複数形になるのはその容器であり、数えられない名詞の方ではない点に注意。以下は、その代表的なもの。

(1) 容器で数える

a cup [two cups] of coffee [tea] (コーヒー [紅茶] 1 [2] 杯)

a glass [two glasses] of water [milk] (水 [牛乳] 1 [2] 杯)

a bag [two bags] of flour (小麦粉 1 [2] 袋)

(2) 形状で数える

a sheet [two sheets] of paper (紙 1 [2] 枚), slice of bread (パン 1 [2] 枚)

a bar [two bars] of chocolate [soap] (チョコレート 1 [2] 枚 [石鹸 1 [2] 個])

a piece [two pieces] of cake [cheese, chicken, paper]

(ケーキ 1 [2] 切れ [チーズ 1 [2] 切れ, 鶏肉 1 [2] 切れ, 紙切れ 1 [2] 枚])

(3) 単位で数える

a kilogram [200 grams] of beef [flour] (牛肉 [小麦粉] 1 キロ [200 グラム])

a tablespoon [two tablespoons] of olive oil (オリーブオイル大さじ 1 [2] 杯)

[a tablespoonful [two tablespoonful(s)] of ... という表現もある]



発展 可算／不可算は捉え方の問題

hair（髪の毛）は、捉え方によって可算／不可算が変わる。たとえば、注文したラーメンに髪の毛が入っていたら、店員さんには Hey, there's a hair in my ramen!（おい、ラーメンに髪の毛入ってるぞ）と言うことになる。1本1本を可算名詞としてとらえているわけである。一方、最近ストレスで髪が結構抜けたな、などという場合には、I've lost lots of hair. となる。髪の毛を総体として捉えているので、不可算になる。

1つの名詞には〈可算（としての）用法〉／〈不可算（としての）用法〉があると考えた方がよい。

たいていの名詞は、可算名詞・不可算名詞にくっきりと二分できるものではなく、可算名詞／不可算名詞「として扱う」と考えた方がよいということだ。その名詞を「話者がどう認識しているか」が、その名詞を可算として扱うか不可算として扱うかを分けるポイントになる。

例えば military power と power を〈不可算〉と捉えれば「軍事力」という抽象的な意味になるが、「アメリカ」などのような「軍事力を持った国」を具体的に頭に描いた場合には、a military power や two major military powers(2大軍事大国)などと〈可算〉扱いにすることになる。



ここが Point! <前置詞+抽象名詞> で形容詞や副詞の働きをすることがある

・ **コーパス** <of + 抽象名詞> = 形容詞の働き (▶ pp.618-619)

of concern (関心をもって = concerned), **of help** (役に立つ = helpful),
of importance (重要な = important), of interest (興味深い = interesting),
of use (役に立つ = useful), **of value** (価値のある = valuable) など

この of は《かたく・主に書》で、後に主に抽象名詞を従えて、「…という性質を持った」の意で用いられる。なお、これらの名詞の前に any, great, little, much, no, particular, some などの修飾語を伴うことも多い。

This book is **of particular value** to all high school students.

この本はすべての高校生にとってとりわけ価値がある。

・ **コーパス** <with [without] + 抽象名詞> = 副詞の働き

with care (注意深く = carefully), with confidence (自信をもって = confidently),
with difficulty (苦労して), **with ease** (容易に = easily), without doubt (疑
うことなく = doubtlessly), without patience (性急に = impatiently) など

この with は《かたく》で《様態》を表す。例えば、with care であれば「注意をもって」→「注意して」と考えることができる。なお、これらの句では名詞の前に any, great, little, more, no, some などの修飾語を伴うことも多い。

Fragile, Handle **with Care**. 壊れ物につき取り扱い注意。〔郵便物などの注意書き〕

※ **コーパス** その他 前置詞+抽象名詞

at first (初めのうちは), **at home** (在宅して; 《主に英》くつろいで),

at last (ついに, とうとう), **at once** ((1) 《かたく》すぐに (2) 同時に),

at risk (危険にさらされて), by accident (偶然に),

by nature (本質的に; 生まれつき),

by virtue of A (《かたく》A の理由[おかげ]で), **in addition** (その上, さらに(加えて)),

in advance (前もって), in anger (怒って), **in [by] contrast** (対照的に),

in fact (実際に(は)),

in favor [《英》favour] of A (A に賛成で), **in general** (たいていは; 概して),

in public (公然と, 人前で),

on average (平均して) [on the [an] average の形は《比較的まれ》],

on behalf of A (A の代理で), on purpose (わざと),

on top of A (A の上に; A に加えてさらに《悪いことに》は) など

3 名詞の複数形

可算名詞には単数形と複数形がある。複数形を作るときに、単数形に-s [-es] をつけて作る**規則変化**の名詞と、それ以外の形をとる**不規則変化**の名詞がある。

1 規則変化

⑪ Those **stores** sell various PC **accessories**.

706

これらの店では様々なパソコン用品を販売している。

規則変化名詞の複数形は、store (単数形) → **stores** (複数形) のように、原則として**単数形の語尾に-s [-es] をつける**。ただし、accessory → **accessories** のようにスペリングに気を付けなければならないものもある。

注意すべき規則変化名詞の複数形 (単数形の語尾→複数形の語尾)

● s, sh, ch, x, z で終わる語: -es をつける (発音は /ɪz/)

class → **classes**

brush → **brushes**

church → **churches**

tax → **taxes**

waltz → **waltzes**

※例外: -s をつける (発音は /s/)

stomach → **stomachs**

epoch → **epochs**

● o で終わる語: -es をつける (綴りは es でも発音は /z/)

potato → **potatoes**

tomato → **tomatoes**

※例外: -s をつける (発音は /z/)

radio → **radios**

photo → **photos**

piano → **pianos**

scenario → **scenarios**

規則的な活用では **-es** をつける。不規則なもので **-s** だけをつけるのはほとんどが短縮形だから。また **-o** で終わる名詞は、他国語からの借入語が多く、その中でも古くから英語に入り、複数形もよく使われて完全に英語としてなじんだ語 (potato, tomato, hero など) には **-es** をつけるが、比較的新しく英語に入ったものには **-s** だけをつける、という傾向がある。

radio(s) < radio telegraphy

photo(s) < photograph

piano(s) < pianoforte

scenario(s) [比較的新しい外来語 (イタリア語)]

子音 + y で終わる語: y を i に変えて **-es** をつける (発音は /z/)

university → **universities**

melody → **melodies**

theory → **theories**

fantasy → **fantasies**

固有名詞を複数形にする場合は、We have three Satos in our class. (我がクラスには佐藤さんが 3 人いる) のように語尾にかかわらず **-s** のみをつける。

※語尾が /s, z, f/ で終わる語については、発音の都合上 Macintosh → **Macintoshes** のように **-es** /ɪz/ をつける。

2 抽象名詞→普通名詞

19 It's **a shame** that we couldn't win the finals.

714

我々が決勝戦に勝てなかったのは残念なことだ。

抽象名詞が普通名詞のように用いられ、具体的な事例や種類を表すこともある。shame は「恥」という意味の抽象名詞だが、上の例では《話》で具体的な出来事（「残念なこと」）を指す。

cold（寒さ）→ a cold（風邪）、pity（哀れみ）→ a pity（残念なこと）、
love（愛情）→ one's love（恋人） など

類例 It's **a pity** that you've lost your wallet. 君が財布を無くしたとは気の毒だ。
“I'm afraid I can't come to the party tonight.” “Oh, what **a shame**.”
「今晚のパーティには行けないかもしれない」「それは残念」

I'm going to start **a business** in my local town of Tenma.

私は地元の天満で商売を始めるつもりだ。

cf. Today, many small **businesses** sell their products on the Internet.

今日では、多くの小企業がインターネットで商品を販売している。

【！】 形容詞がつくと具体的な事例として普通名詞のように用いられることが多い。

We had **a light snow** last evening. 昨晩は雪が少し降った。

There will be **an extra charge** for delivery.

配達には追加料金がかかります。

練習問題 5：カッコ内を埋める適切な語句を選択しなさい

→解答 p.486

- ① 君は論文をすぐに提出しなければいけない。
You have to hand in () right away.
① paper ② a paper
- ② 私は将来アインシュタインのような人になりたい。
I want to be () in the future.
① Einstein ② an Einstein
- ③ 経験不足のため、仕事がなかなか見つからない。
Because of a lack of (), I'm having trouble finding a job.
① experience ② experiences
- ④ 私たちは旅行で素晴らしい体験をした。
I had () during the trip.
① great experience ② a great experience

発展 名詞の性 (gender) と PC

英語の名詞の中には、「男性」「女性」によって使い分ける名詞がいくつかある。こうした区別がはっきりとあるのは、古英語の「男性名詞」「女性名詞」「中性名詞」の名残とされている（ドイツ語などには今もこの区別はある）。ちなみにここでの「性」は sex（生物学的性）ではなく、gender（社会・文化的性）である。

brother（兄弟）－ sister（姉妹）， husband（夫）－ wife（妻），
father（父）－ mother（母）， son（息子）－ daughter（娘），
uncle（おじ）－ aunt（おば）， nephew（おい）－ niece（めい）

また， boyfriend / girlfriend といったように語頭や語尾（女性を示すのに -ess をつけるなど）で性を示す名詞もある。

prince（王子）－ princess（王女），
waiter（ウェイター）－ waitress（ウェイトレス），
god（神）－ goddess（女神）， hero（ヒーロー）－ heroine（ヒロイン）

職業名を表す一部の語については，性差別につながるおそれがあるということで，近年，両方の性に使える表現が代わりに用いられるようになってきている。こうした男女差別に限らず，社会的少数派，人権，環境・動物保護などに配慮した言動のことを politically correct（政治的に正しい；《略》PC；名詞は political correctness）という。

chairman / chairwoman → chairperson [chair]（議長）

fireman / firewoman → firefighter (消防士)

policeman / policewoman → police officer (警察官)

steward / stewardess → flight attendant (客室乗務員) など。

また、どちらかに偏ることが多い職業の場合は、共通に使える語が好まれる。

actress (女優) → actor (俳優)

waitress (ウエイトレス) → waiter, server (接客係) など。

Grammar in Writing 続・Something is something!

大きなカテゴリーを説明する際の something は、意見文でも活躍します。たとえば、「飲酒可能年齢を 18 歳に引き下げることの是非」というトピックで書くとしたら、

1) I do not think it is a good idea to lower the legal drinking age to eighteen. 法的に飲酒可能な年齢を 18 歳に引き下げるのは良い考えだとは思わない。

これを自分の主張としたときに、どのように理由付けるとよいのでしょうか。

2) This is because alcohol is bad for health.

なぜならば、アルコールは身体に悪いからだ。

常識的な内容ですね。しかし、これだけでは主張を支える理由としては弱いです。なぜならば、アルコールが身体に悪いとすれば、それは 20 歳未満に限った話ではありませんから。これを理由とするなら、年齢を問わず飲酒は禁止、と主張しなくては筋が通りません。このように、意見文で、適切な理由付けを書くのは意外と難しいものです。その原因の 1 つが、与えられたトピックの範囲内だけで考えようとしてしまうことです。この例の場合、「18 歳で飲酒すること」から考え始めると難しいのですね。

では、どうするか。いったん、話を大きくしてみましょう。年齢や飲酒のことはいったん度外視して、そもそも「法律」って何でしょう？

3) The law is **something that helps a society function properly**.

法律とは、社会が適切に機能することに役立つものだ。

専門的にはともかく、一般的にはこのくらいの定義で間違っていないでしょう。では、この定義に従えば、「18 歳から飲酒が可能になる法律」は、「社会が適切に機能すること」を促進するのか、と考えてみましょう。否定の立場としては、たとえば「現状でも飲酒による問題は起きているのだから、飲酒できる人を増やしたら、問題も増える」などと言うことができるでしょう。それを踏まえると、次のように論を展開することができます。

4) I do not think it is a good idea to lower the legal drinking age to eighteen, because such a change will not make our society a better place. **In the first place, the law is something that helps a society function properly.** Will our society function more properly if drinking is legalized at the age of eighteen? It is not likely. Even now we have many alcohol-related problems such as drunk-driving, and violence under the influence of alcohol. If more people are allowed to drink, there will be more of such problems.

法的に飲酒可能年齢を 18 歳に引き下げるのは良い考えだとは思わない。なぜならば、そのような変更が、私たちの社会をより良い場所にするのではないであろうからだ。そもそも法律とは、社会が適切に機能することに役立つものだ。 18 歳で飲酒が合法に

なったら、私たちの社会は、より良く機能するようになるのだろうか。そういうことはありそうにない。今でさえ、アルコールに関連した問題は多く起きている。たとえば、飲酒運転やアルコールの影響下での暴力などだ。飲酒が許される人が増えれば、そういった問題もまた増えるだろう。

与えられたトピックを、いったん、より大きなカテゴリーの中でとらえなおすことで、「そもそも論」に基づいた説得力のある議論ができるようになります。そのきっかけとして、something での定義づけを活用してみてください。
